荻窪で進められている“地域に開かれたコモンスペースを持つ賃貸住宅プロジェクト”。タイル絵付けワークショップ ラウンジ床に使うタイルに絵付けをするワークショップ。自分が書いた絵のタイルが、どこかに使われる。

建設予定地に建つアパートの1室でのミーティング風景。毎回、様々な方々が参加される。

家族の家から地域のイエへ
ーシェアする暮らしからみえるものー

講師：山口健太郎　大橋徹平

■ 6/9（土）18：00 ～ 20：00　■あんさんぶる荻窪 4F 教室

2 年前、「よく耳にするようになったシェアハウスについて、一般の方にもわかるような講座をやってほしい」と、講師を打診された際の初めての打合せ。シェアハウスをその時すでに数年運営していた私たちが、「シェアハウスという住まい方はすでにかなり広がりつつあり、むしろ淘汰が始まっている」という認識を講座運営者のみなさんにお伝えすると、一様に驚かれているご様子。建築の専門家の間でさえ、あまりに認識の差があることを感じ、講座を作るうえではできる限り参加者の方々の目線を考慮しなければ、と感じたのを覚えています。そして今回、この講座をまとめるにあたっては、さらに 2 年前の講座開催当時とは世の中の状況が進んでおり、講座で提起させていただいたことが現実に現れつつあるということを含めて、「講座その後」ということもお伝えしたいと思います。

そもそも私が初めて他人と一緒に住んでみようと思ったのは、20 年近く前の大学生の時。当時はシェアという言葉もなく、インターネットも広まる前で、仲間募集的な個人的広告を集めた雑誌を通じ、「一つ屋根の下で一緒に住んで、切磋琢磨してみないか？」という呼びか

山口健太郎■やまぐちけんたろう
埼玉県深谷市出身。1974 年生まれ。明治大学建築学科卒。学生時代からひとつ屋根の下で多様な価値観の人たちとシェアする暮らしを志向。2003 年よりシェアハウスを運営。一級建築士、宅地建物取引主任者。建築・不動産の枠にとらわれない、人と人の関係を豊かにする場つくりを探求している。

大橋徹平■おおはしてっぺい
東京都杉並区出身。１９７３年生まれ。都立西高校　横浜国立大学建設学科卒。IT 企業に就職し、一転、コミュニティのある暮らしづくりに取り組む。24 時間 365 日、公私混同、常に邁進、自称、日本一の共同生活実践者。シェアハウス・下宿をコーディネイトする（株）ジープレイス代表。世田谷を拠点とする「ガチャバンともに生きる会」で、知的障害者の介助、事務局を担う。コレクティブハウジング社理事。

取り壊し後ミーティング。アパート取り壊し後は別の場所で、ミーティングやふらっとお茶会などが続けられている。

けが始まりでした。残念ながらその時は大家さんや不動産業者の厚い壁を越えられず、のちに社会人になってから、ネット上の掲示板を通じて再度シェアメイトを募集、一緒に物件探しから行い、初のシェア生活を実現に至ります。そこで私はシェアメイトの友人・知人が気軽に訪れるような、個に閉じない開かれた住まい方を経験しました。

今回講師をさせていただいた私たちそれぞれにシェアハウス運営を経験してきましたが、各物件それぞれにその様相は千差万別。私が運営したシェアハウスでは、入居中から比較的交流が盛んで、退去した人が物件近くに住んで度々ハウスを訪れたり、ハウス取り壊しのため全員退去した後も定期的に集まるなど、そこでの暮らしで培った関係性を保っているようですし、大橋氏が運営されているシェアハウスでは外国人が多く、「外国人入居者の場合は、（日本人同士とは違い）必然的に言葉でコミュニケーションが必要となり、話し合いでの解決になる」など、外国人入居者ならではのエピソードも。また、SNS やメールなどでもやり取りがありつつ、置き手紙などもあって心温まる場面も少なくないとのこと。

そんなシェアハウスですが、ここまでが一気に物件数が増え認知が広がったのは、不動産業者がその収益性に目を向けたからにほかなりません。結果、運営する事業者がいて、住みたい人はどこのシェアハウスにするかを「選ぶだけ」といったシェアハウスのイメージが定着しました。事業者は入居者を獲得するために共用部や全体のインテリアにデザイン性を持たせたものが増え、またハード面だけでなく、農家の指導のもと菜園づくりが楽しめる物件、シングルマザー向け・企業家向けなどテーマ性やソフト面に付加価値を付けて運営する物件も増えています。

運営者が存在するシェア型の住まいは、入居者のプライバシー確保や保安など、管理上の都合から外に対しては閉じた住まいになりがちですが、入居する方の志向によってその在り方は大きく変化します。facebook などのソーシャルメディアが広まるにつれ、普通の個人が嗜好性や想いを共有できる他人とつながりを持ちやすくなった昨今、こんな住まい方をしたいという想いを持つ人やすでに住んでいる人の自発的な声に端を発して作り上げる住まい、はじめから地域に対して開くというスタンスで関係者が話し合いを重ねながら作られるシェア型の場づくりも生まれつつあります。居住者だけでなく、地域の人も一緒になってプロセスや想いを共有し、ゆっくりと広がっていく、まさに地域の中での場づくりが行われています。空き家増加や人口減少への対症療法的対策としてだけではなく、地域の社会的潜在力を引き出すような場の作られ方として注目したいものです。

＜ワークショップ風景１＞
講座参加者も自分の身近な場でシェアを考えるワークショップ。

＜事例：荻窪家族プロジェクト（杉並区）：
http://ogikubokazoku.jimdo.com/ ＞

居住者だけでなく、地域の人にも使ってもらうことを想定し、アトリエやラウンジ、集会室といった充実した

共用部を併設するシニア向けシェア型住居として新築計画が進行中。計画においては趣旨に賛同する方々が集まってミーティングや、ラウンジ床に使われるタイルの絵付けワークショップなどを重ねてきた。建設中の現在も、意見交換の場としての「ふらっとお茶会」や、メンバーが講師役となって行う勉強「ちょこっと塾」などを開催している。（写真参照）

＜ワークショップ風景２＞
幅広い年齢層が参加され、活発な意見交換が行われた。

模造紙は、各グループごとのアイディアで埋められている。

■ワークショップ

講座後半には、あえて家という枠から少し離れ、参加者のみなさん自身が、シェアすることで広がる可能性を感じたり気づくきっかけになるよう、身近な場所を思い浮かべながら、想像を広げられるようにとワークショップを構成しました。

グループごとに分かれてもらい、お互いはなしやすいきっかけづくりとして参加者同士の自己紹介から始まり、自分の生活圏内にある空き家や空きスペースや使えそうな空間を、自分たち自身で何かに利用するとしたら、どんなことができるか、アイディアを出し合います。「空き家があったら」という漠然としたことではなく、「私の家の何軒隣りの空き家」「○○商店街のあの空き店舗」というように具体的な場所を想定することで、お帰りになった後もワークショップで得たアイディアを思い出していただけたら、と考えたのです。

どのグループにおいても、皆さん、身近な空き物件をよくご存知。また、ご自宅の空き部屋、親の家が空いているという方も何人か。

具体的な場所をイメージしつつ、どのグループにも割と共通しているのは、フリーマーケット、コミュニティカフェ、休憩所、保育所、宅老所、仕事探しの場、出会いの場、ご飯を食べる、パフォーマンスする、コンサートを開く、サークル活動など、やってみたいと意見が出ました。

その他、既存の施設を利用してのアイディアや児童館で絵本作り・屋上で星空観測・公園でバーベキュー・寺でカフェ・神社でお祭りなどや、自然豊かな場所として、神田川・善福寺川・玉川上水などの川原でラジオ体操、夜の緑道でお化け屋敷、駅のホームで異業種交流会、駅前広場でカラオケ大会、バス停で連歌を綴っていくという意外性のあるアイディアも。

比較的年齢層が高めの参加者の皆さん。最初こそ「身近な場所でシェア？」という困惑気味な雰囲気が漂いましたが、各グループそれぞれに具体的な場所のイメージと思い入れを出し合うにつれ、皆さんの関心度が徐々に高まり、最後は時間が足りなくなるほど熱く語っておられました。その後、各グループでの話を全体で共有し、会を終了しました。

（山口健太郎、大橋徹平）　担当：篠田弘子

工学院大学学生の荻窪周辺の計画案

伊東豊雄氏設計の座・高円寺、レストラン内部

荻窪のこれから　ー暮らしやすいまちへー

講師：大塚敏之　倉田直道

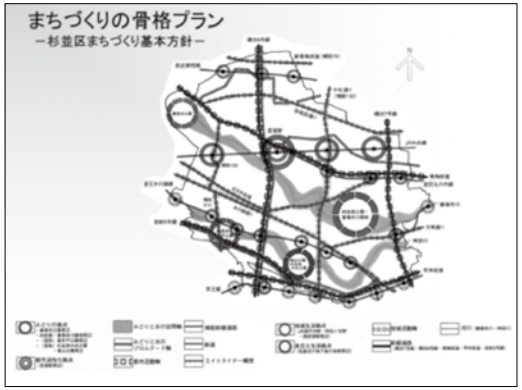
■ 7/28（土）18：00 ～ 20：00　■あんさんぶる荻窪 4F 教室

「杉並区のまちづくりについて」

大塚敏之

大塚敏之■おおつかとしゆき
1953 年生まれ
1977 年都立大学建築工学科卒
1979 年杉並区役所入所
1995 年課長
2007 年まちづくり担当部長
2013 年都市整備部長
2014 年退職（現職・保健福祉部参事）

杉並区は 23 区の西端に位置し、面積 34 Ｋ㎡、人口約 54 万人、一般会計約 1500 億円の都市です。航空写真からも分かるように、善福寺川緑地や南部・西部のまとまった公園や緑地、その他住宅地の緑（緑被率 22％、24 年度調査）がありますが、一方で環状 7 号線や中央線沿線では木造住宅の密集地が見られます。都市計画図では第 1 種低層住居専用地域が６４％で、第 2 種中高層住居専用地域まで、住居専用地域を合わせると 80％を占めています。典型的な各駅を中心とした住宅都市と言えます。少し区の公園や公共施設を紹介しますと、元大田黒元雄氏の屋敷を日本庭園として整備した大田黒公園。隣接する杉並第十小学校とともに、蚕糸試験場跡地を防災拠点として整備した蚕糸の森公園。旧日本興業銀行グランド跡地を整備した区立最大の柏の宮公園 (43,458㎡) があります。また、公開プロポーザルで設計者を選定し、伊東豊雄氏が設計した杉並芸術会館 (座・高円寺)。パッシブデザインを重視して、エコスクールとして設計し、環境教育を重点的に行っている荻窪小学校。角川源義氏の遺族から寄付を受け整備した角川庭園



（幻戯山房）などがあります。

さて、杉並区は今年３月に 10 年後を見据えた区政運営の指針となる「杉並区基本構想（10 年ビジョン）」を策定しました。将来像を「支えあい共につくる安全で活力あるみどりの住宅都市杉並」としています。5つの目標をたて、戦略･重点的な取り組みを含め、方向性を定めています。それを計画的に実行していくために、総合計画・実行計画を定めています。まちづくりの分野では「災害に強く安全・安心に暮らせるまち」「暮らしやすく快適で魅力あるまち」「みどり豊かな環境にやさしいまち」が目標となっています。

ここで、まちづくり分野の状況や動きを少し紹介します。まず、杉並区のまちづくりの骨格プランですが、JR 中央線の荻窪駅周辺を都市活性化拠点とし、高円寺駅・阿佐ヶ谷駅・西荻駅周辺を地域活性化拠点とし、私鉄駅周辺をそれぞれ身近な生活拠点と位置付けています。環７・環８・青梅街道・甲州街道・放射５号線の幹線道路を都市活動軸とし、補助幹線を地域活動軸としています。また、善福寺や和田堀公園などの大規模公園・緑地をみどりの拠点にし、それらをみどりと水の空間軸で繋いでいます。

これまでの面的なまちづくりとしては地区計画などを中心として事業を行ってきました。特に災害危険度の高い木造住宅密集地域に対しての防災対策では、蚕糸試験場・気象研究所跡地地区、阿佐ヶ谷南・高円寺南地区、天沼３丁目地区、環状７号・８号線沿線地区、方南通り沿線地区で地区計画や沿道地区計画、あわせて不燃化事業など様々な工夫を重ねて、安全なまちづくりに取り組んできました。中でも、蚕糸･気象研跡地のまちづくりでは、跡地周辺を防火地域に指定し、同時に不燃化助成を行いました。30 年経った現在では不燃化率も格段に向上し、一定の安全性を示す数値まで改善しています。天沼３丁目まちづくりでも地域の中心にあった屋敷跡地を密集事業で取得し天沼弁天池公園として整備しました。現在では阿佐ヶ谷南・高円寺南の防災まちづくりに重点的に取り組んでいます。区の独自事業として震災救援所周辺や救援所までの啓開道路沿道の建て替えに不燃化助成を行っています。また、杉並区では早くから狭隘道路の拡幅整備事業に取り組んでいますが､防災面だけでなく、日常生活上、清掃車や介護車などの円滑な交通にも寄与しますので引き続き重点的に取り組んでいきます。

景観まちづくりの面では、大田黒公園周辺地区で、歴史や文化のかおり、豊かなみどりを活かしたまちをつくることを目標にまちづくりを展開しております。同じ荻窪では、第１ステップとして駅前広場整備を行いましたが、今後、さらなるまちづくりの展開があると思っております。その他、現在の動向として、京王線の連続立体事業や旧東電グランド跡地の下高井戸公園整備計画や東京都の事業になりますが、NHK グランドを中心とした

荻窪小学校

角川庭園、幻戯山房

都市計画高井戸公園の計画が進もうとしております。今後とも皆様のご理解とご協力をお願いして、私の話を終わりにします。ありがとうございました。

（大塚敏之）

倉田直道■くらたなおみち
建築家、アーバンデザイナー。まちづくり、都市景観デザインが専門。工学院大学建築都市デザイン学科教授。

街の魅力を活かそう
学生とともに考える荻窪のまちづくり

倉田直道

2008 年から毎年、工学院大学の 4 年生の設計課題として荻窪駅周辺のまちづくりを扱ってきました。その設計課題のなかで学生達と議論してきたこと、学生達の提案を通して見えてきた荻窪のまちづくりの可能性について話をさせて頂きます。

荻窪は住宅都市あるいは生活都市である杉並区の拠点地区の一つであり、住宅都市の顔となることが期待されている街であります。顔となる街というのは、荻窪住民の生活に対する拘りや価値観、荻窪らしい生活の質（QOL: Quality of Life）、そしてそこに暮らす人々の街に対するコミュニティ・プライドが現れている街ということでもあります。

そこで、荻窪らしい生活の質（QOL: Quality of Life）を体現した暮らし方を仮に「荻窪スタイル」と呼ぶことにします。そして、その「荻窪スタイル」を明らかにすることが荻窪という街の将来の姿を明らかにするのではないかと考えて街の調査や提案に取り組みました。

先ず、「荻窪スタイル」の大事な要素として、様々な世代、居住者と来街者、異なる関心を持つ人々などの間に多様な交流があるということです。これは家庭、職場（学校）以外の第３の場所（サードプレイス）と呼ばれる場所での活動です。これを少し拡大すると、歴史・文化との接触機会や、自然との接触機会もこれに含まれます。そうした多様な交流機会を生み出すまちづくりのシーズとしては、クラシック音楽の殿堂でもある杉並公会堂、杉並アニメーションミュージアムなどがあります。太田黒公園、知る区ロードなども貴重な資源として学生達が興味を持っています。さらに、荻窪駅周辺の５つの個性的な商店街も重要な交流機会の場として評価をしており、その商店街をどのように活かすかといった提案もされています。具体的には、それぞれの商店街の起点と終点）に人が訪れる施設を配置し（（既に存在している施設の活用も含む）、商店街における人の流動を活性化したり、商店街の中に子育て支援機能、高齢者生活支援機能やまちの学校といったコミュニティ施設を導入することで多様な交流の場を付加したりするといった提案があります。

市民と工学院大学生のワークショップ

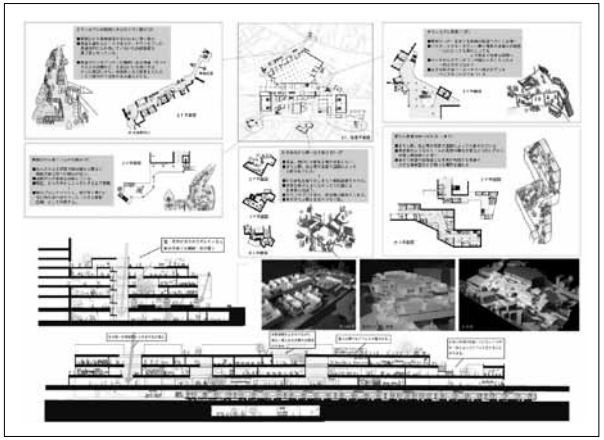
工学院大学生の計画案模型

また、これはデータなどに裏付けられてはいませんが、まち歩きなどを通して、学生達は荻窪に暮らしている人々が環境や健康に対して強い関心を持っているのではないかという印象を持っています。そこで「荻窪スタイル」のもう一つの大切な要素として、環境に配慮した健康なくらしを挙げています。これは、スローライフ、スローフッドといった生活の価値に代表されるものであ

り、歩いて暮らせる街、自転車や公共交通を中心とする移動といった、脱自動車のまちづくりもそうした「荻窪スタイル」に沿うものと考えています。

そこで、交通という観点から荻窪らしい生活の質、「荻窪スタイル」を観てみたいと思います。荻窪はJR中央線そして地下鉄丸ノ内線、多くの路線バスの結節点であります。公共交通という観点から見た場合、非常にアクセス条件の優れた街であるといえます。また幹線道路という点では、環八、青梅街道が地区を貫通しており、車にとってもアクセスしやすい街かもしれません。ただ学生の調査からも明らかなように、幹線道路を除くと荻窪駅周辺の街路は昔からの狭小な街路が多く、車にとって便利な街とはいえず、そのことで結果として歩いて暮らせる街になっているともいえます。環境に優しく健康にも良い移動手段である自転車も荻窪住民のライフスタイルを象徴する存在です。現在は、違法駐輪などの課題だけがクローズアップされていますが、荻窪という街に自転車を積極的に受け入れていくかいうことが「荻窪スタイル」を体現したまちづくりに繋がっていくように思います。交通という観点からは、歩行者、自転車、選択できる公共移動手段を優先した交通まちづくりをトータルに進めることが荻窪らしいまちづくりの戦略になると思います。

工学院大学学生の計画案



これからの荻窪のまちづくりでは「荻窪スタイル」の暮らしが展開される場づくり（プレイス・メイキング）が大きなテーマとなると考えます。これまでの都市のデザインは、都市の空間を整備して終わりということが多かったように思います。これからの都市のデザインは、都市の多様な活動（パブリックライフ）のための場づくりに取り組んでいく必要があると思います。抽象的な表現になりますが、それは、空間だけでなく、その空間で展開される様々な人々活動や行為をデザインすることでもあり、空間と人々の活動が相互に作用することによりそこがはじめて固有の場（プレイス）となると考えています。そのため、荻窪のまちづくりにおいては、既存の資源を活かしつつ、街のなかに「荻窪スタイル」と呼べる生活の受け皿としての多様な場を創出することができるかにかかっているように思います。例えば、現在の荻窪駅周辺をみると、駅前広場はバスに占有された交通広場となっています。公共交通の利便性や安全性を向上させる整備は必要ですが、併せて人のための広場の創出は不可欠であります。場としての広場は、「荻窪スタイル」のショーケースでもあり、荻窪における生活の質を象徴するものである必要があります。

学生達の提案の幾つかは、そうした問題意識に基づく場づくりへの提案の一つであると理解して頂ければと思います。

（倉田直道）

三梨 伸／作 「蕾・花・実」ー植木の圃場で出荷した樹木の堀跡に数百の陶片でー　藤野圃場農園／立川市

杉並の緑とまちづくり　講師：井上洋司　吉野 稔

■ 9/29（土）18：30 ～ 20：30　■あんさんぶる荻窪 4F 教室

杉並の緑とまちづくり　ーみどりを守り、育て、質を高めるー

杉並は緑豊かな住宅都市をめざしています。しかし、一方で貴重な屋敷林や農地が失われ、土地の細分化が進んでいます。それは、東京への過度な人口集中が土地需要を生み、地主の相続税対策としての土地の切り売りが原因と思われます。今回はこのことの重大性に着目し、みどりを守り、育て、質をたかめるためにどうすればよいか学びます。講師に吉野稔（杉並区･みどり公園課長）と井上洋司（ランドスケープアーキテクト）の両氏をお招きしました。

農地とアートをつなぐ　ーART IN FARM の活動ー

井上洋司

私は、立川で 17 代続く農家の息子です。職業はランドスケープアーキテクトですが、家業も継いでいます。いま、日本で農業を営むことは非常に難しく、とりわけ大都市近郊においては多くの困難に直面しています。農業経営における困難さと重ねて、相続税対策があり、土地をもつことの負担は極めて重いのです。都市化の進行により、近郊の風景が急激に変化していることは、改めて説明する必要もありませんが、今回のテーマ「緑とまちづくり」という観点からみると、多くの問題が含まれ

井上洋司■いのうえようじ
1949 年東京生まれ。1975 年工学院大学大学院・修士課 程修了。1979 年 背景計画研究所設立。1987 年(株)背景計画研究所・代表取締役、1998 年～ 都立短期大学・早稲田大学・藝術学校・講師。
＜主な研究・翻訳・著書など＞
四国・九州における石垣の調査・研究、「歴史的地域の保存」ヨーロッパ会議レポート / 翻訳、近世寺院空間の研究、スペインの集落の調査・研究、「日本の都市環境デザイン 85 ～ 95」、「雨の建築学」日本建築学会　共著

脇田 真／作 「大地の面影」ー来場者にそのときの木陰を寒冷紗にトレース・書いたところだけ大地が見えるー　藤野圃場農園／立川市

ています。今日は農業を営みながら景観を整えるという仕事に携わる一人の人間の活動についてお話させていただきます。

私は大学で建築を学び、その後は主として建築の歴史や都市の環境について学んできました。そのなかで次弟に景観への関心を深めていくわけですが、私の場合、農業を継承しなければならず、相続の問題が大きな課題でした。実際にこの問題が発生した時、私は試練の場に立たされました。樹林のある土地の活用を迫られたのです。樹木を伐って更地にして売却すれば、相続税を支払うことは簡単ですが、それは私には出来ませんでした。そこで、一つのプロジェクトを立ち上げました。それは、樹木を伐採せずに重度の障害者施設を低層の分棟式の配置で完成させることでした。自然環境を損なうことなく、社会的な要求に応えながら相続税対策としたのです。

私は、アートを通じて農地の保全、活用を模索、提唱する「ART IN FARM」という活動を 2007 年から立川で始めました。一見、関係なさそうな「農業」と「アート」をコラボレートさせることで、都市空間の一部としての農地の意義を知ってもらい、相互の刺激によって隠れていたそれぞれの社会的意義を知り、さらに高め合うことが出来るのではないかと考えています。「ART IN FARM」は、都市近郊の農地を保全するために、農家と共に土地保全の意義と意味を探って行こうというムーブメントです。初めに、自分の農園（ぶどう園）で行いました。生産緑地となっているぶどう園を利用し、予め高

三梨 伸／作 「ゆりかご」ー手でひたすら織ったハンモック・葡萄畑を漂うみたいー　木村ぶどう農園／世田谷区

めに作ったぶどう棚の下を音楽と演劇の場として活用することにしたのです。ぶどう棚の下に光が加わり、これまで経験したことのない独創的な劇空間の出現にこころを躍らせたのです。680 人もの来場者があり、NHK もとりあげたこともあって一躍評判となりました。この企画は引き続き継続しています。立川だけでなく世田谷のぶどう園でも行いました。このことによって、農地のもう一つの役割を発見できたことは収穫であり、日頃、無縁なひとたちを繋ぐことが出来ました。その後、鑑賞に来た人が実行委員になったり、農のパッケージデザインや独自グッツの販売など、活動は広がっています。そんな中 “土地はイメージによって価値を持ち、その良好なイメージを持つ活動は将来の良好な環境形成をもたらす ” という信念で活動を続けています。

（林 昭男）

杉並区のみどりの現状と将来

吉野　稔

吉野 稔■よしのみのる
杉並区職員。1959 年杉並区生まれ。1982 年東京農業大学造園学科卒。1982 年杉並区役所環境課、公園課、西土木公園事務所、南土木公園事務所、公園緑地課、2005 年環境部ごみ減量担当課長、都市整備部維持課長、杉並土木事務所長。2007 年みどり公園課長。2014 年土木管理課長。

杉並区は東京 23 区の西端に位置し、面積は 34.02 平方 km あり、23 区中 8 番目の大きさです。武蔵野台地のほぼ中央に位置し、地形は全般的にみて平坦ですが、西部がやや高く、東に向かって低くなっています。本区の土地利用をみると、宅地が 60％以上を占めています。用途地域をみると、第一種低層住居専用地域の占める割合が 64％で最も高く、住居専用地域を合わせると全体の 85,8％となっており住宅都市に相応しいと云えます。

みどりの現状は緑被率でみると 21.84％（743.0ha/ 平成 19 年度調査）で、前回（平成 14 年度）と較べ、0.93 ポイント増えています。これは、樹木の成長、緑化活動によるとみられます。本区の緑被地の約 70％が民有地であることも特色です。

樹林（300 平方 m 以上）が 5 年前と較べ約 18ha, 農地は約 51.2ha 減少しています。農地は、区の北部と南西部に残されており、その 70％（34.4ha）が生産緑地に指定されています。

近年、宅地のミニ開発や相続発生時の敷地の細分化にともなう屋敷林の伐採、農地の宅地化などにより僅かに残るまとまった緑も減少し続けています。こうした状況のなかでどのような施策がたてられているのか。「杉並区みどりの基本計画」を見ると、「みどりが暮らしのなかに息づくまち・杉並」を目指し、五つの基本計画を掲げています。

１．身近なみどりを守ろう。

身近にある樹木、樹林地、農地の保全をあげ、屋敷林などの保全の強化、農地の保全では、農とのふれあいの機会の充実を強調しています。

２．新しいみどりを創ろう。

緑化地域制度を導入し、緑量を増やすこと。公園の整備も目標です。

３．みどりの質を高めよう。

景観計画の誘導により、まちなみ緑視景観を向上し、環境に資するみどりづくりを推進すると共に剪定枝、落ち葉などのリサイクルを推進する。

杉並らしい歴史風土を伝える屋敷林（写真提供：森田隆広）

体験型農園（写真提供：森田隆広）

４．みどりでまちをつなげよう。

みどりの拠点づくり（河川、道路の緑化）をはかり、みどりのネットワークをつくる。

５．みんなでみどりを育てよう。

環境学習の充実、みどりの相談所の設置、みどりの情報の発信、イベントの開催などにより、みどりについての意識の向上をはかる。区民とのパートナーシップを図ります。

杉並区みどりの基本計画は、五つの基本的な施策によって組み立てられています。今回の JIA 杉並・土曜学校のテーマは、「都市化による樹木・樹林地や農地の減少にどう対処するか」にあったと思います。この点に関しては、樹木などの保護制度の充実、所有者との借地契約に基づく市民緑地「いこいの森」の設置、屋敷林の保全の強化（後世に残したい屋敷林の選定）などがあります。農地の保全に関しては、生産緑地の維持、拡充、区民農園などの設置、営農への支援、農とのふれあいの機会の充実（環境学習、学校給食への地元野菜の供給）などがあります。

（林 昭男）

杉並の祭りをつくる　－祭りを支える商店街の心意気－

講師：冨沢武幸　小川勝久　司会：曽根幸一

■ 11/10（土）18：00 ～ 20：00　■セシオン杉並

曽根幸一■そねこういち
JIA 杉並地域会前代表

杉並区には 14 箇所も神社があります。これらの神社が何時創祀されたかは明らかではありませんが、大宮八幡は 11 世紀に建立され武蔵の国の三大宮の一つで、子育て・安産の御利益があるといわれます。区内には他に八幡の名のつく神社が 4 つ、稲荷の名が 2 つありますが稲荷の方は商売繁盛の神様で鳥居と狐がシンボルです。いずれも起源は古く江戸時代に定着した神社です。このあたりは江戸に野菜などを供給していた地域であったことを考えれば、四麟は林や田畑に囲まれ八幡や稲荷と呼ぶ神社が地域コミュニテイの核になっていたことは容易に想像がつきます。これらの神社は今でも祭りが継続しています。そんな集落であった杉並の人口が急増するのは、関東大震災が契機でした。中央線が出来たのは 19 世紀の末ですが、新宿から青梅街道を走る市電（現メトロ丸の内線）が早く、高円寺駅や阿佐ヶ谷駅が増設されるのは 1922 年（T.11 年）です。その翌年に大震災がおきて都心から郊外への移住が始まったのです。以来西武新宿線（1927）や京王井の頭線（1933）の私鉄の駅も沢山できます。東京市が都になって杉並、和田堀、井荻、高井戸 4 つの街が杉並区となるのは戦中です。とりわけ中央線沿いは、村から街へと生活の圏域も変

わっていきます。多くの文士が住んでいたし、軍部の要人の街でもありました。そのような経緯から戦後は「村」ではなく「街」としての祭りを「つくる」必要があったのだと思われます。「日本には＜街並＞はないけど＜祭り＞がある。」と外人観光客に指摘されることがありますが、「祭り」はわが国の重要な文化であり、観光資源でもあります。今回は「祭り」の継続に情熱を傾けてきた高円寺の冨沢武幸さんと阿佐ヶ谷の小川勝久さんのお二人に、お話を伺いました。お二人共地元で生まれ育った方であることは云うまでもありません。

阿佐ヶ谷パールセンターの七夕祭り

「高円寺の阿波踊り」

冨沢武幸氏

冨沢武幸■とみざわたけゆき
東海大学文学部卒業。NPO 法人高円寺阿波おどり振興協会事務局長

高円寺のまつりの発端は 1957 年（S32 年）現在のパル商店振興会に青年部が誕生し「何かイベントを」となったのが始まりです。当初は盆踊りくらいしかアイデアはなく神輿は高価で買えません。そんな中で「四国の徳島には、道を通りながらの踊りがある。」との情報から「高円寺ばか踊り」で出発したのです。最初は民謡の先生やチンドン屋に教わった「佐渡おけさ」のリズムで高円寺駅から街を踊りながら走り抜けたといいます。以来存続の投票や警察との交渉など多くの難関がありましたが、やがて本場の「木場連」と巡り会い、当地の連長であった鴨川長二氏に厳しい手ほどきをして頂くことになります。こうして「ばかおどり」は「阿波おどり」に改称。真の阿波踊りを撮影して帰京すると、これを観た 12 人の有志が徳島に練習で留学します。阿波おどりは踊るグループを「連」と呼びますが 1966 年には地元に「葵信連」「天狗連」などが出来ます。連の種類はいろいろで景気によっても左右されます。こうして「50 周年記念誌」も刊行し、今では都内で「阿波おどり」を催す商店街が 30 ～ 40 箇所はあるといわれます。パル商店街のテナント化が進行し役員やスタッフの減少から継続が危ぶまれた時期に、徳島出身の大学性や上智大学の支援チームの連携を得て NPO 法人が立ち上げられました。今では数百人のボランティアチームを結成しています。マネージや案内、ゴミ集めなど学生の支援は極めて重要

高円寺の阿波踊り

です。近年阿波おどりホールを備える「座 . 高円寺」が完成し新時代を迎えることができました。現在は企業の支援も得てＪＲ高円寺駅と東京メトロ新高円寺間の通りを舞台にしていますが、約 1 万人がプレーヤー、見物客は 120 万人以上で、本場、徳島市の阿波踊りに次ぐ規模です。毎年 8 月末、「浅草サンバカーニバル」と共に催される東京の二大現代夏まつりに成長したのです。

「阿佐ヶ谷の七夕まつりとジャズストリート」

小川勝久氏

小川勝久■おがわかつひさ
立教大学法学部卒業。阿佐ケ谷商店街振興組合相談役、マイタウン阿佐ケ谷協議会理事長

阿佐ヶ谷は桃園川沿いの浅い谷で、中杉通り（133 号線）は環 7 や環 8 と同時に震災復興期に計画された道路です。これを計画したのは宮崎駿が「となりのトトロ」でモデルにした赤い屋根の家（北阿佐ヶ谷：家は焼失） を設計した近藤謙三郎（震災復興院：後満州で活躍、首都高速道路の推進者）であることは、以外と知られていませんのでこの機会にご紹介しておきたく思います。（司会）

小川さんは眼鏡店を経営し、中杉通りの並木を見つめ維持管理に精力的に参加されてきた方です。パールセンターは古くからの街道で、戦後買い物客のため歩行者専用道路にした商店街です。まだ中央線が地上を走っていて阿佐ヶ谷駅にはダイヤ街も Dila もない 1954 年（S.29 年）に商店会組合の皆さんは地元振興のため全国の夏祭りの視察をします。そこで祭りには「七夕がいい」となります。パールセンターの七夕祭りは色紙を下げるだけでなく、宙に浮いた巨大なキャラクターが売りです。古紙で張りぼてをつくり彩色するのです。しかし夕立がくると色が溶けて来街者の衣服を汚すおそれがありました。そこで 1961 年、都電が地下鉄化する頃にアーケードがつくられます。都内では品川区の武蔵小山と共に古いものでしたが､平成になって建て替えられました。「七夕まつり」は 8 月の初旬に開かれ次は 60 回目を向かえます。また、1994 年には区の支援もあって、もうひとつのイベント「ジャズストリート」が企画されます。1987 年に始まっていた「荻窪音楽祭」（クラシック音楽が主体で今年 27 回目「21 世紀の荻窪を考える会」が主催）にも刺激されたと思われます。夏の七夕、秋のジャズです。こちらは今年で 20 回目です。パブリック、ストリート、バラエテイなどの会場形式があり山下洋輔など名演奏家も参加して賑わいを演出しています。

山下洋輔氏の演奏

とはいえ、阿佐ヶ谷、高円寺とも商店街のテナント化は共通する深刻な問題です。少子高齢化の現在、全国の商店街はイベントの開催、キャラクターの採用、ポイントカードなどの工夫を重ねています。コンビニやネット販売など、ものの購買方法が変わってしまった今日、TMO（タウンマネージメント機関：まち全体を一つの商業区と捉える自治組織）の話もありますが、高円寺のパル商店街や、阿佐ケ谷のパールセンターを覗いてみる限り、地方にみられるシャッター街の衰退など全く感じられません。両氏ともまだまだ個店の共栄を目指す意気込みをお持ちです。

（曽根幸一）

映画「シェーナウの想い」にも登場する高台の教会。屋根全面が太陽光発電装置。（撮影：守屋欣史）

ヴォーバンの都市計画を 2 度の訪問計画から紹介。（スライド提供：青島裕之）

杉並の住まいとエネルギー

ー環境先進国に学ぶ住環境ー

講師：彦根アンドレア　青島裕之　寺尾信子

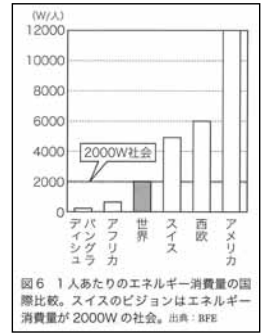
■ 1/26（土）18：30 ～ 20：30　■産業商工会館第 1・第 2 集会室

林 昭男校長の挨拶

主旨説明

2012 年秋、彦根さんの郷里ドイツ南部の視察ツアーに、JIA 杉並地域会の青島・寺尾両名が参加。ツアーのキーワード「2000W 社会※」等を彦根氏に、現地の先進的住宅を青島氏に、杉並の事情に照らした改修例等を寺尾氏に紹介してもらう。（林 昭男）

※「2000W 社会」；スイスで最初に提唱されたエネルギー政策ビジョン。先進国の平均的なエネルギー消費量は 6000W だが、それを生活の質を落とさずに世界平均の 2000W まで下げ、その 75％以上を再生可能エネルギーでまかなうというもの。100W の電球を 20 個灯し続けるのと同じエネルギー出力量で生活と仕事、消費をやりくりする。そのような社会が達成できれば、温暖化を 2℃以内に抑えられるという。（引用文献；滝川薫著、学芸出版社刊「サステナイブル・スイス」P26。文章・図とも。）



2000W 社会の意味を説明する国際比較図（出典：サスティナブル・スイス）

2000W 社会に向けて

彦根アンドレア

1. 2008 年度 JIA 環境建築賞・最優秀賞受賞

IDIC（PS 岩手インフォメーションセンター）は最初の設計作品。1992 年竣工、17 年目に賞を受賞。サステナブル建築は、その頃から、それ以前にも増して意識を強く持ち取組むようになった。

彦根アンドレア■ひこねあんどれあ
ドイツ・コンスタンツ生まれ。1987年シュトゥットガルト工科大学卒業後、日本の設計事務所勤務を経て、1990年彦根明とともに（株）彦根建築設計事務所設立。IDICの設計でJIA環境建築賞最優秀賞を受賞。3.11以後、欧州のエネルギー自立地域の発展を再確認し、視察ツアーを企画。設計監理業務の傍ら自然エネルギーの啓蒙活動も行う。日本エネルギーパス協会副会長。

2. 1992年リオ、環境サミットでの少女のスピーチ

「環境と開発に関する国連会議」での12歳のセヴァン・スズキ「未来に生きる子供たちのため」の伝説的スピーチの紹介。http://www.sloth.gr.jp/relation/kaiin/severn_riospeach.html

3. 2011.3.11の東日本大震災以後

故郷のドイツ南部の環境先進地域見学のツアーを企画。

4. 自然エネルギーの活用と地域内経済循環

巨大オイルタンカーで産油国が先進国にオイルを運び、大金を持ち帰って巨大建造物を造っている風刺画に同感。太陽エネルギー、バイオマスや他の自然エネルギー活用により、地域内でエネルギーを創り、消費し、地域内で経済循環を起こすことの重要性。

5. スイスのバーゼル市の紹介

環境対策に住民が積極的に関与、法律も整備され、断熱改修はじめ官民一体の取組み。

6. 日本のエネルギー消費

USAより遥かに小さく、ドイツよりも小さいが、内容が問題。必要エネルギーに対する消費エネルギーは「我慢」により小さくなっている。

7. 室内環境の整備

体感温度には建物の室内の表面温度が関与しておりそれは断熱性能に深く関係。

8. 日本の基準

「窓」だけドイツと比べても基準が甘いと感じるが、近年では日本でも断熱気密性能の高いサッシが普及しつつある。

彦根さんの郷里・コンスタンツ市内の緑豊かな木造集合住宅。

9. シェーナウ　エネルギー自立地域の紹介

映画「シェーナウの想い　～自然エネルギー社会を子どもたちに～」。
（https://www.youtube.com/watch?v=KD_2CAAA9gs）
チェルノブイリ原発事故のあと、市民が立ち上がり自然エネルギーの電力会社をつくった実話。ツアーの視察地。

先進的集合住宅2例

青島裕之

青島裕之■あおしまひろゆき
1956生まれ。杉並区在住。東京、ニューヨーク、ウィーンの設計事務所で勤務後、1993（株）青島裕之建築設計室設立。仕事では秋田・福島・新潟・青森等、自然豊かで雪の多い地域とご縁が深い。秋田で2009竣工の木造の町役場の設計では、地域の風土と自然エネルギーを活用した庁舎を実現。都市や環境を建築によってつなぐデザインに力を入れている。

Ⅰ

フライブルグ市／ヴォ―バン (Freiburg/Vauban)

・人口22万、ライン川と黒い森に挟まれた15000ha、環境先進都市。水と緑。歩いて暮せる楽しい街。古都。若い人が多く活気がある。トラムと歩行者と自転車が共存。

・杉並とフライブルグ。杉並は人口55万。3400ha。面積は20%。森がない。人口は倍以上。

・ヴォーバン住宅地。1998年に最初の住宅完成。2006年ほぼ完成。住戸2000戸位。優れたアーバンデザイン。

・元フランス軍駐留地。レイヤーごとにいろいろな要素。合理的に秩序づけて計画。街区も多様性に満ちている。

・住宅団地はコーポラティブ住宅が多い。緑が根付き、成功していると感じられた。

フライブルグ市・ヴォーバンのコーポラティブ住宅

＜質疑応答＞（抜粋）

Q1　環境配慮設計では何を大切に考えているか？
A（彦根）
・住環境。外も中も大事。近隣に迷惑をかけないこと。次の子どもたちへゴミを残さない。次の人は大丈夫かな？　隣の人は大丈夫かな？と考えて設計をしている。

Q2　街区の計画と方位の関係は、欧州の場合はどのようになっているか。方位が定まっていないように見えるが、街は方位を気にして計画されているのか？
A（青島）アルプスの北側の場合は冷房の心配がない所が多い。ヴォーバンは東西軸と南北軸、混在。森のほうからの冷気を夜間に取込む。最後に高い棟で受け留める。
南面を大事にするとは限らない。そのため、街区も色々なパターンができ、バリエーションに富む。
A（彦根）東に面する住戸、西に面する住戸、様々。どちらでも良い。ソーラーパネルを載せる場合は、南面が必要。一般的には西（大西洋側）から風が来て東へ抜ける、として計画される。ドイツは緯度が高く、冬、入ってくる日差しが低い。東や西から光を入れる考えが多い。

寺尾信子■てらおのぶこ
東京生まれ。横浜国大・大学院修士課程修了後、設計事務所勤務を経て、1981年阿佐ヶ谷にて建築事務所を開設し、31年が経過。前半20年は住・都公団（UR都市機構の前身）の仕事として、調査研究、集会所設計、集合住宅設計等に従事。JIA所属以後、約10年、住宅設計の他、環境建築の研究・セミナー講師などに従事。

・全屋根面ソーラー電池の集合住宅。10年前の訪問時で普通の仕様が300ミリ断熱の壁。
・居住と働く場のある街区を見学。住宅、単純な四角い箱。シンプルな形態。均等グリッドに見えるが実はフロンテージもプランも違う。バルコニーのあるアウトフレームが完全に自立、熱的に本体から絶縁。
・コージェネシステム。排熱利用の地下階の洗濯室。

Ⅱ

コンスタンツ市／タンネンホフ（Knstanz/Am Tannenhof）

・1住戸130～160㎡、1棟に7戸の木造の集合住宅。単純な矩形だがニーズに合わせたひとつひとつ違うプラン。
・各戸の地下室にあるコージェネシステムが印象的。熱交換、ヒートポンプで温水冷水を作りながら、貯湯。排熱も洗濯乾燥に利用。空気の取り入れ口と排気口は外部に見えるが「室外機」を持たない魅力的な設備。

コンスタンツ市・タンネンホフの1棟7戸の集合住宅。左は外観、右は各戸用の地下室の設備。

杉並の断熱改修事例

寺尾信子

1. なぜ断熱改修が重要か

・杉並区は住戸数27万戸あまり。7万戸位が一戸建て、20万戸位が集合系（長屋含む）。新築は4000戸あまりだが、近い将来、省エネ基準適合義務化となってゆくために、残される既存住宅の改修に焦点を当てた話。
・北海道では30年以上前から高度な断熱住宅の実績あり。本州は多くの既存住宅は断熱性能が弱く改修が求められる。都市部の過密地域での断熱改修の事例を2点。

2. 港区内のマンションの断熱改修

築31年のマンションの購入・入居時の断熱改修例。
（1）病気予防
（2）インテリアの改善
（3）光熱費の縮減
（4）上質の室内空気環境
（5）小さなエネルギー消費。

3. 阿佐谷、寺尾事務所の断熱改修工事

・断熱改修（Q値1.5、C値1.5）の結果、温熱性能の成果があらわれる。1月、外部が0℃で二重窓の中間6.9℃、室内17.6℃、という状況。冬でも春や秋の日平均気温程度。各階で10畳大用のAC、各1台で良好な環境。
・改修工事の機会をとらえて単なる改装ではなく、断熱性能の向上をしっかり図る改修工事が望まれる。

4. 部分断熱改修の技術例紹介。

部屋単位の断熱改修の技術も生まれてきた。水回りと居室の温度差の拡大は、ヒートショックを誘因する危険性があるため居室だけの改修はできるだけ避けたい。

（寺尾信子）

Q3　日本では行政から働きかけないと動かない傾向があるように思うが、環境先進国から学ぶべきものとして、日本ではどういう切り口から取り組めばよいか？
A（青島）自分ができることからやる。エネルギーを創ることは話題になる。エネルギーを抑えることは話題になりにくいが、実践できる。できることからやってゆき、エネルギー消費を抑えるように努力している。与えられた範囲で最大限できることをする。いきなり色々なことができるわけではない。まずは断熱改修がやり易い。ひとりひとりが努力する。根気よく訴え続ける。
A（彦根）まずは自分のところから省エネを実行する、という運動から始めていることが映画のポイント。専門別に実施することが大事。車を作っている人。工務店。様々提案することも必要。車2台必要ですか？どこから、ということはない。行政も、個人も、あちらこちらからやる。小さいことの沢山の積み重ねが重要。欧州は素晴らしい例もあるがそれは一部。隣の町がしていることを知らない人もいる。一歩ずつやればよい。

Q4　コージェネシステムについて詳しく話してほしい。
A（青島）つかまえたエネルギーを逃がさない、という思想。空気は入れるときも出すときも必ず熱交換している。見学したアレックス社の製品は、ヒートポンプを活用して冷水温水をやりとりしていた。地下室にシステム一式が設置され、給気口は確認することができたが「室外機」が存在していなかった。熱交換とコージェネの開発が進んでいるのが印象的であった。